広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	呉市倉橋町室尾周辺出土の考古資料
Author(s)	梅本，健治
Citation	広島大学埋蔵文化財調査研究紀要 ， 14 ： 1 - 17
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53945
URL	https://doi.org/10.15027/53945
Right	
Relation	

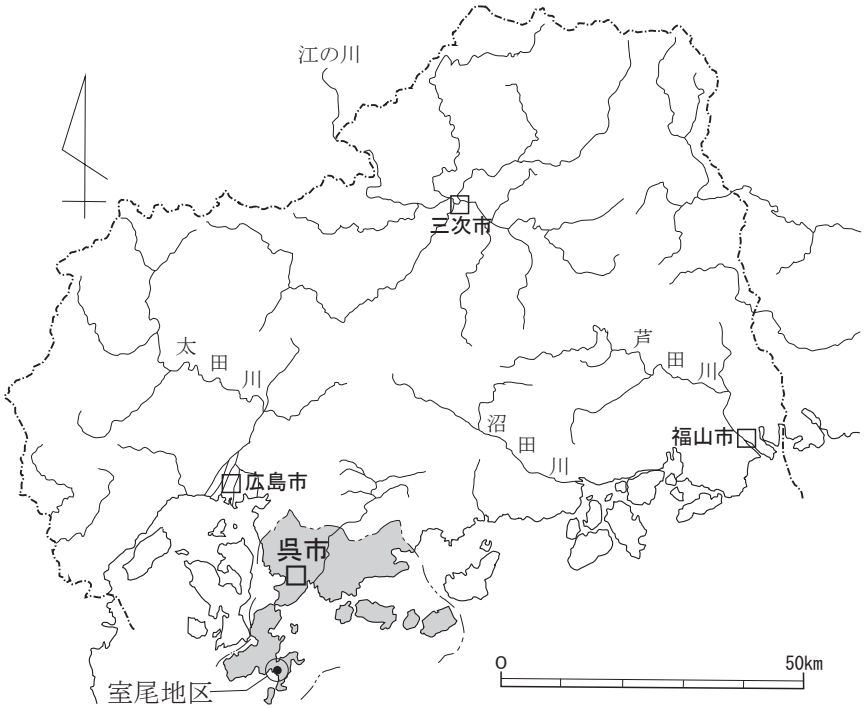
呉市倉橋町室尾周辺出土の考古資料

梅本　健治

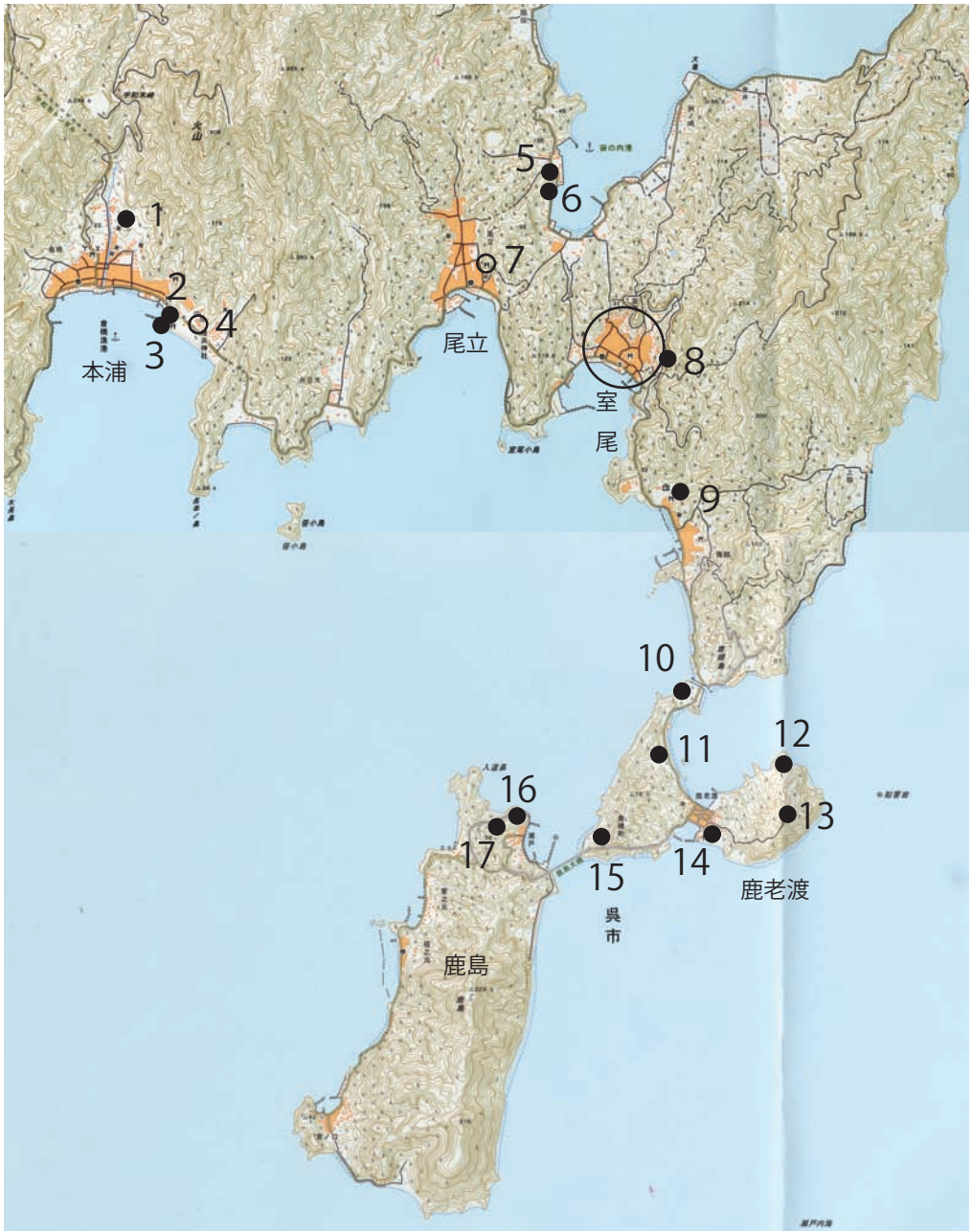
本稿は，呉市在住の三田村修氏が 2021（令和 3）年 9 月に当広島大学総合博物館に寄贈された資料のうち，考古資料 9 点を紹介するものである。

今回報告する寄贈資料の内訳は，石器 1 点，石製品 1 点，土器 3 点，金属製品（鉄製品・銅製品）4 点の計 9 点である。これらは寄贈者の三田村氏の父親の実家（呉市倉橋町室尾）に保管されていたもので，出土地や出土状況は不明とのことである。その所属時期としては縄文時代，中世，近世，時期不明と様々で，器種の内訳は，有茎尖頭器，石錘状石製品，土師質土器椀・杯，瓦器椀，煙管，釘状鉄製品，用途不明銅製品，銅銭（寛永通寶）である。

呉市倉橋町室尾周辺の地理的・歴史的環境（第 1・2 図）



第1図　呉市位置図（1:1,250,000）アミ目は呉市域を示す。



1 丸子山城跡　2 桂浜ドック跡　3 桂浜台場跡　4 桂浜神社　5 横挽第1号古墳 **　6 横挽第2号古墳 *
7 尾立八剱神社　8 鍛冶屋古墳 *　9 海越番人居館跡　10 白浦古墳 *　11 丸岩第1・2号古墳 *　12 岩屋古墳 *
13 遠見山番所跡　14 伊勢ケ浜台場跡　15 矢尻古墳 *　16 瀬戸第1号古墳 **　17 室ノ浦古墳 **
（古墳名の後の * 横穴式石室，** 箱式石棺を埋葬施設とすることを示す。）

第2図　呉市室尾地区周辺遺跡分布図（1:50,000）
（国土交通省国土地理院発行の 1:25,000 地形図倉橋島・鹿老渡を 1:50,000 に縮小して使用した。）

(1) 地理的環境

倉橋町はもと広島県安芸郡倉橋町で，2005（平成 17）年に北側に位置する中規模都市の呉市と合併（編入）し，呉市倉橋町となった。倉橋町は，倉橋島（面積 69.47 ㎢）の中・南部に当たり，島全体の面積の 8 割近くを占める。呉市倉橋町には倉橋島以外に有人島の鹿島や無人島の羽山島・横島・黒島などが含まれる。倉橋町の最高標高は倉橋島の南西部に位置する岳浦（だけうら）山（標高 491 m）で，中南部の本浦地区には標高 408 mの火（ひ）山がある。倉橋島の地形の特徴は，海岸から急勾配で立ち上がる山がちな地形であることである。列状をなす複数の山稜から成り，海に向かって突き出した半島や岬とそれらの間の入り江によって出入りの多い海岸線を形成している。平地が入り江の狭い海岸部に限られ，これらの平地とこれに続く山麓の緩斜面上に集落が広がる。

地質的には主に広島型花崗岩（中生代深成岩）から成り，三つの山塊に区分される。倉橋町は，このうち中部（倉橋山地）と南部（室尾山地・鹿島山地）の山塊が該当する。中部の倉橋山地は標高 400 ～ 500 mの中起伏山地で，南東麓に帯状に山麓地が分布するため平地に乏しい。最も山塊の面積が小さい南部は標高も低い。標高 200 ～ 300 mの中起伏山地とその周囲の標高 160 m以下の小起伏山地から成り，湾奥の砂浜と背後の海岸低地に小規模な集落が分布する。

(2) 歴史的環境

旧石器時代～古墳時代　呉市域は遺跡の発掘調査例が少なく，考古学の面から歴史的環境を明らかにするのは難しい。倉橋町内では現在までのところ，旧石器・縄文時代の遺跡は見つかっていない。ただ，亀ケ首の北 5km の町北東部に近接する情（なさけ）島（呉市阿賀町）では，旧石器時代のナイフ形石器やスクレイパーなどが採集されている。弥生時代の遺跡としては，玢岩（ひんがん）製の太型蛤刃石斧が出土した岩畔（いわぐろ）遺跡（宇和木地区）がある。古墳時代になると，前半期の箱式石棺を埋葬施設とする古墳や後半期の横穴式石室をもつ古墳が，尾立・室尾・海越・鹿老渡・鹿島地区などに存在する。箱式石棺を埋葬施設とする古墳としては，尾立・横挽第 1 号古墳，室尾・飛呂井古墳群，鹿島・瀬戸第 1・2 号古墳，同・室の浦古墳などがある。横挽第 1 号古墳では石棺の板石の内面に朱の塗布がみられ，土師器・壺などが出土している。飛呂井古墳群では須恵器（杯蓋・杯身）が出土し，6 世紀後半頃のものとみられる。瀬戸古墳群からは須恵器が出土している。横穴式石室をもつ古墳としては，尾立・横挽第 2 号古墳，室尾・鍛冶谷古墳，海越・細田古墳，鹿老渡・白浦古墳，同・丸岩古墳群，同・岩屋古墳，同・矢尻古墳などがある。鍛冶谷古墳は

径 10 mの円墳で，鉄刀・須恵器（有蓋短頸壺・長頸瓶・壺・提瓶）が出土した。細田古墳からは須恵器（横瓶）が，白浦古墳では鉄刀や須恵器（杯蓋・杯身・有蓋短頸壺・提瓶）が出土している。岩屋古墳は尾根鞍部に立地する径 21 m，高さ 3 mの円墳で，全長 6.75 mの右片袖式の横穴式石室を埋葬施設とする。矢尻古墳からは，玉類や須恵器（椀・有蓋短頸壺・提瓶），土師器などが出土している。尾立・鹿島・横島地区には祭祀遺跡が存在する。尾立・トロブ遺跡では多くの手づくねの土師器（坩・高杯・甕）や須恵器（杯蓋・杯身・坩蓋・高杯・甕・提瓶），滑石製模造品などが出土した。古墳時代の祭祀遺跡としては，室尾・山見の下遺跡，鹿島・尻郷遺跡，横島・横島遺跡などがある。また，古代ではあるが，亀ケ首遺跡では和同開珎の枝銭が出土している。これらの古墳時代～古代の祭祀遺跡は，いずれも岬の突端の砂州に立地しており，航海の安全を祈る祭祀などに伴うと考えられる。

古代・中世以降は，文献資料に当地域の事象が散見されるようになり，考古学的にも城跡をはじめとする遺跡が存在する。

古代（飛鳥・白鳳・奈良・平安時代）「倉橋」という地名は，6 世紀末の崇峻天皇の倉橋柴垣宮のために奉仕する集団として置かれた「倉橋部」に因むとされている。製塩・釣魚などを生業とする倉橋島の海民たちは 6 世紀頃に安芸国沿海域に置かれた阿岐の海部の一員として，贄（にえ）（天皇に供する食物）の塩・海産物を貢納する一方で，難波津と筑紫那津（なのつ）の間を結ぶ連絡や朝鮮半島への遣使・出兵に際する水手（かこ）役を務めたと考えられている。7 世紀後半には，呉湾沿海域・島嶼部の安芸郡「海里」（のちに「安摩郷」）や広湾沿海域と考えられる賀茂郡「カツ里」（のちに「香津郷」）などが置かれる。10 ～ 11 世紀になると，律令制的な郷制が解体され，呉浦・矢野浦・江田島・波多見島・倉橋島・蒲刈島などの浦や島が徴税対象の領域となる。11 世紀末～ 12 世紀初頭にかけて，旧安摩郷域にあたる国衙領の各浦・島は，荘園（寄進地系荘園）化の波に晒されていく。呉浦の呉氏は未開地を開発した「呉別符」を石清水八幡宮に寄進し，12 世紀初頭には波多見島・江田島・呉浦・矢野湾などが「安摩荘」として立荘される。一方，倉橋島は摂関家勧学院領倉橋荘となる。このほか，周辺では蒲刈の日高荘（興福寺領），能美荘（皇室領）などの荘園が成立する。

9 世紀半ばの瀬戸内海では中央に調庸・雑米を送る船舶が洋上で襲撃される被害が頻発することから，海賊鎮圧令（追捕官符）が度々発令されている。その後，平安時代末期から鎌倉時代にかけて，瀬戸内沿岸域における寄進地系荘園の成立・増大に伴って，石清水八幡宮領・興福寺領・摂関家領・春日社領など諸荘園の神人・僧などの債権の取り立

てに伴う武力行為や各荘園における本所（領家）と地頭の対立に根差した襲撃・略奪などの暴力行為がその実態とされる「海賊行為」が頻発するようになり，これらの「海賊」の取り締まりが時の中央政府に強く求められていくことになる。

中世（鎌倉・南北朝・室町・戦国時代） 1221（承久 3）年の承久の変以後，鎌倉幕府の実質的な支配が西国方面に及ぶようになると，瀬戸内海航路の安全の確保が幕府に対して要請されるようになる。それを享けて鎌倉幕府は京都の六波羅探題を中心に海賊追捕に本格的に乗り出すことになり，山陽・南海両道の 12 か国に警固役所が設置された。安芸国では 1320（元応 2）年に倉橋島の亀ケ首に警固役所が置かれた。

南北朝時代になると，伊予衆（野間氏・多賀谷氏など）の芸南沿海・島嶼部への北上・定着が進み，戦国時代にかけて，これら呉沿海域・島嶼部の諸勢力が大内氏や竹原小早川氏などの水軍に組み入れられるようになる。そして，14 世紀になると，周防大内氏の安芸内陸部や瀬戸内海沿岸域・島嶼部への進出・領有化が顕著になる。1468（応仁 2）年には，応仁の乱で西軍に与した周防大内氏の上洛の先陣を呉・警固屋・能美・倉橋の海賊衆が務めている。1478（文明 12）年になると，周防大内氏の豊前花尾城攻めに，呉・蒲刈・能美三ヶ島衆が与力し，呉衆の山本氏や警固屋（けごや）氏らが豊前・筑前のうちに所領を与えられている。このように，戦国期には呉地域の海賊衆の多くが周防大内氏に与して水軍として諸方面に戦ったが，16 世紀半ばに大内氏が毛利氏によって滅ぼされると，毛利氏に降りやがて船手方などにとりたてられた勢力がある一方で，大内氏と運命を共にする一族もあった。倉橋町本浦地区の倉橋多賀谷氏は周防大内氏に与力した海賊衆「三ヶ島衆」の一角で，厳島合戦が起こる 2 か月前の 1555（弘治元）年 8 月に降伏勧告を蹴って毛利方の小早川氏に攻められて滅亡している。周辺には，倉橋多賀谷氏の居城である丸子山城跡をはじめ，その支城とみられる釣士田（りょうしだ）城跡や室尾城跡が存在する。また，本浦の桂浜神社や尾立の八剱（やつるぎ）神社には 1480（文明 12）年銘の棟札があり，倉橋多賀谷氏の当主や一族の有力者が「檀那」として記されている。

近世（江戸時代） 江戸時代になると倉橋島は広島藩領となる。古代より倉橋島の各浦は造船業を主な生業としており，広島藩だけでなく，中国地方はもとより九州地方の諸藩からの注文を請け負っていた。倉橋町の南端に位置する「鹿老渡（かろうと）」は，周防上関と安芸御手洗（みたらい）を結ぶ航路の中間に位置する「風待ちの港」として栄え，江戸時代中期には大名の船や商船の往来が頻繁になったため，広島藩によって沖乗り航路の見張所として遠見山番所が鹿老渡に築かれ，番所の番頭や番人らの居館が室尾の南の海越（かいごし）に置かれた。また，桂浜ドック跡は，18 世紀中頃に築かれた日本最古の西洋式の乾式ドック（船渠）跡である。江戸後

期の 18 世紀後半～ 19 世紀前半になると，ロシアやアメリカなど諸外国が鎖国下のわが国に開国を求めて強く圧力をかけるようになり，諸藩においてもこれらに対する沿岸防備が急務となった。広島藩内でも沿岸防備のための施設（台場など）が倉橋島内に整備された。桂浜台場や遠見山番所の近くに築かれた鹿老渡の伊勢ケ浜台場は 1863（文久 3）年に築かれた砲台で，一種の要塞であった。

近代（明治・大正・昭和時代前期） 明治から昭和時代前期にかけて倉橋島は軍事的な要衝と位置づけられるようになる。島南辺の西から大向（おおこう），室尾周辺，亀ケ首周辺，鹿島などに，砲台・弾薬庫・兵舎・探照灯・燃料槽・燃料貯蔵所・特殊潜航艇基地，大砲・機銃等試射場，資材置場など多種多様な海軍関連の施設が築かれる。

寄贈資料について（第 3 図 1 ～ 9，写真 1）

①石器・石製品 縄文時代の有茎尖頭器（1）と時期不明の石錘状石製品（2）がある。

・有茎尖頭器（1） 縄文時代草創期に属し，安山岩製とみられる。表裏全体に風化が顕著で，表面は黄灰色であるが，茎・基部縁辺にみられるごく微細な新しい剥離痕からは本来黒色系の色調であることが分かる。大きさは，最大長 8.65 ㎝，最大幅（茎部上端）2.6 ㎝，身部長さ 7.75 ㎝，茎部長さ 0.9 ㎝，最大厚さ 0.6 ㎝，重さ 13 gと全体に薄手で，軽量である。身部の形態は，先端がやや丸みをもって尖る。先端から 4.35 ㎝付近で最も幅広になり（幅 2.3 ㎝），そこから下方に向かってほぼ直線的に延び，茎部上端（最大幅部分）から 1 ㎝上方で緩やかに屈曲して茎部に向かう。剥離は表裏両面にしっかりなされており，身部は横方向を主体に一部斜行気味，短い茎部は斜行気味の縦方向（下方から）の剥離を行っている。身部の大半は 1 ㎝大のやや大き目な剥離で，基部は 1 ㎝× 5 ㎜大のやや小さめな剥離，身部尖端は長さ 5 ㎜大の小剥離を施している。茎部は短い逆三角形をなすが，明確な抉りや内湾は見られず，側縁は直線的である。

表面（A面），裏面（B面）ともに左側縁（L），右側縁（R），基部（U）の 3 か所の剥離痕群からなる（第 4 図）。

先ず，表面のA面についてみてみると，Lは左→右方向への剥離，Rは右→左方向への剥離と概ね横方向の剥離が行われ，Uは下→上方向といった縦方向の剥離を行っている。これら 3 つの部位の剥離痕群は，概略R（古）→L→U（新）といった時間軸のもとに調整剥離が行われている。これらをもう少し詳細に見てみよう。先ず，両側縁の剥離は，R・Lともに上半がR 2（古）→R 3（新），L 1（古）→L 2 →L 3 と上→下方向への剥離，中央に比較的古い剥離痕（R 5・L 5）があり，RではR 5 から上（R 4），下（R 6）に剥離

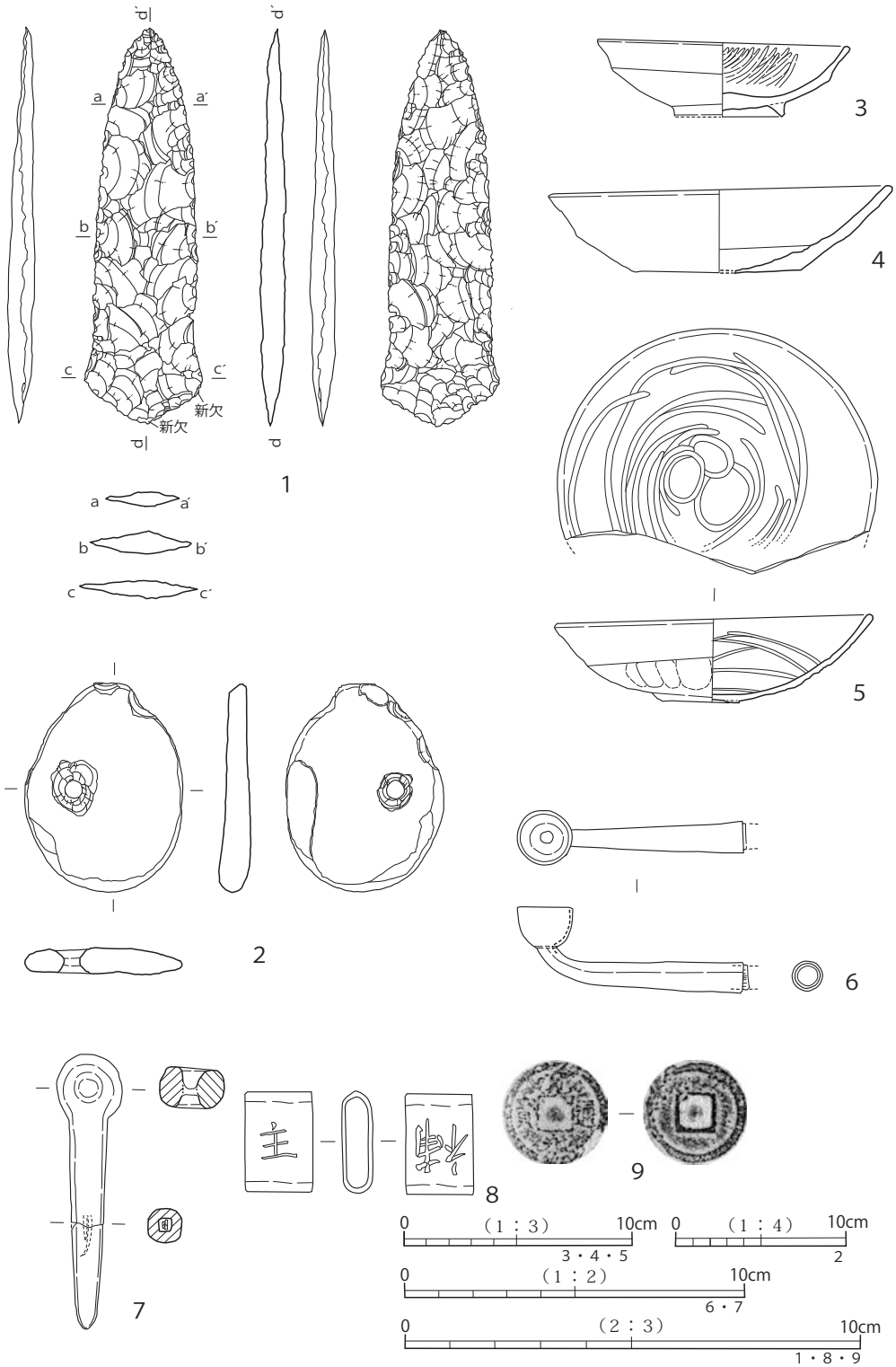
が進み，下半はR 9（古）→R 8 →R 7 →R 6（新）と連続的に下→上方向への剥離が行われている。概略，両側縁ともに中央に比較的古い剥離痕があり，これを挟んで上半は上→下方向，下半は下→上方向へ調整剥離を進めている。基部のUは両側縁のR，Lの剥離に比べて新しく，概ね中央から右，左方向に剥離が進んでいる。

次に，裏面のB面では，左側縁（L）は比較的大きな剥離痕 12 枚（L 1 ～L 12），右側縁（R）は 13 枚（R 1 ～R 13）の横方向主体の剥離痕，基部（U）は縦方向主体の剥離痕群で構成される。大きな剥離の流れとしては，表面（A面）に比べるとあまり整然とはしていない。L・Rはともに飛び飛びに古い剥離痕（L 4・L 7，R 3・R 4・R 10 ＝R 11 など）がみられ，これらから上下に 1，2 枚ずつ剥離が進められている。左側縁では，L 1（古）→L 2（新）（上→下），L 4（古）→L 3 →L 2（新）（下→上），L 4（古）→L 5 →L 6（新）（下→上），L 7（古）→L 6（新）（下→上），L 7（古）→L 8（新）（内→外），L 7（古）→L 9（新）（上→下），L 12（古）→L 11 →L 9（新）（下→上），L 10（古）→L 11（新）（内→外）と成る。右側縁では，R 1（古）→R 2（新）（上→下），R 5（古）→R 3 →R 2（新）（下→上），R 4（古）→R 5（新）（内→外），R 5（古）→R 6 →R 7（新）（上→下），R 9（古）→R 7（新）（下→上），R 8（古）→R 9（新）（内→外），R 10= R 11（古）→R 13（新）（上→下），R 11（古）→R 10（新）（下→上），R 11（古）→R 12（新）（内→外），R 11（古）→R 13（新）（上→下）と成る。両側縁間の剥離作業の流れは，左右ジグザクに行われているが，古い剥離痕同士の切りあいをみると，基本的には左側縁側の剥離が先行して剥離作業が進められたようである。基部（U）の剥離痕群は右側縁（R）最下段のR 13 より新しく，左側縁（L）最下段のL 12 より古い。これら基部の調整剥離は，左から右方向に比較的整然と進められたと考えられる。

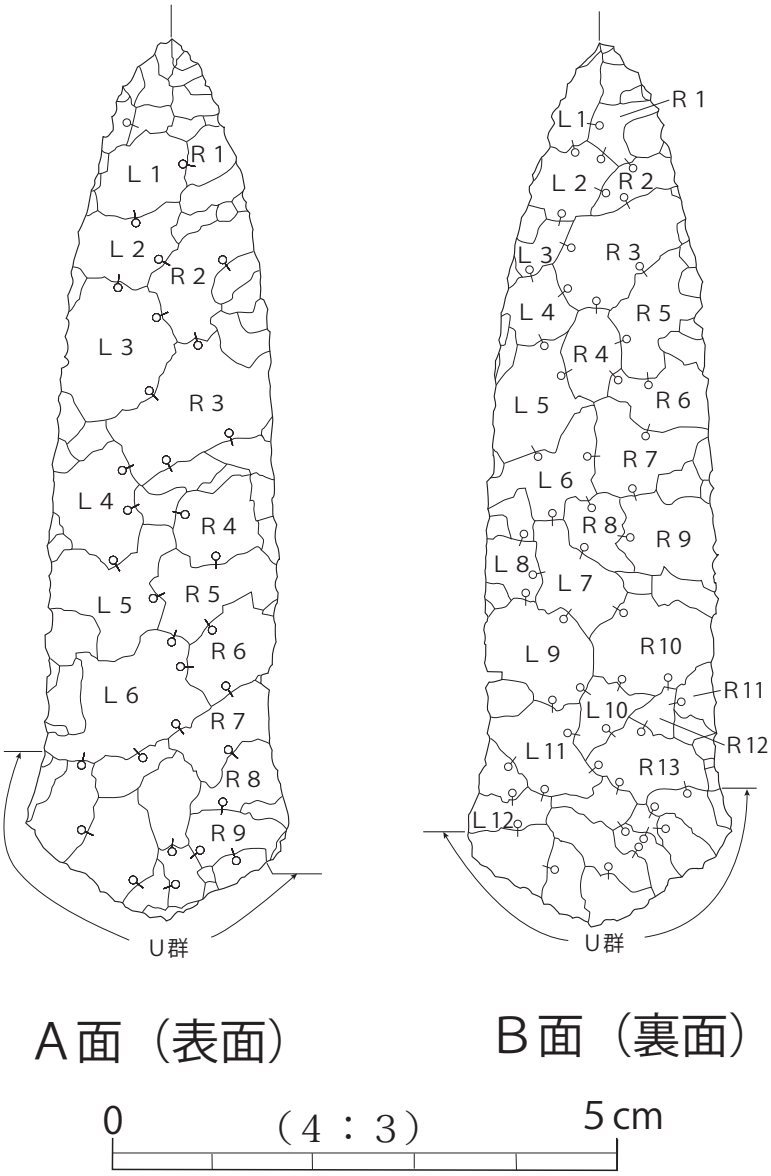
・石錘状製品（2）不整楕円形の扁平な製品で，用途は不明である。大きさは縦 12.15 ㎝×横 9.25 ㎝，最大厚 1.8 ㎝，重さ 281g である。上端の縁辺に小剥離（最大 5 か所）を加えて，つまみ状にしている。中央左寄りに縦 3.2 ㎝×横 2.6 ㎝（貫通部分径 1 ㎝）の円孔が穿たれている。穿孔は表裏両面からの加撃によっている。全体に扁平な形状だが，左右方向はほぼ同じ厚さ，上下方向は上側が薄く下方向に向かって厚くなっている。縁辺部は全体に丸みが強い。石材は不明だが，灰～暗灰色の色調で，縦方向に筋状の摂理面が無数に見られる。上端には白色の牡蠣状の貝殻が付着している。

②**土器**　いずれも中世の土器類で，土師質土器椀（3）・杯（4）と瓦器椀（5）がある。

・土師質土器椀（3）口径 10.8 ㎝，器高 3.1 ～ 3.4 ㎝，高台径 5.2 ㎝の大きさで，断面



第3図　遺物実測図（2:3, 1:2, 1:3, 1:4）



第4図　有茎尖頭器剥離痕切合関係図（4：3）

三角形の輪高台を貼り付けている。体部はやや丸みを持つ底部から外上方に緩やかな曲線を描いて立ち上がり，体部半ばで稜を介して外上方に薄く引き伸ばし端部を丸く納めて口縁としている。調整は，体部内面は斜め方向のヘラミガキを施し，内底面は未調整である。外面体部上半は回転ナデ，下半は未調整，高台から外底面にかけて回転ナデを行っている。色調は灰黄色，胎土は1㎜以下の砂粒を含むものの概ね精良，焼成は非常に良好である。残存状況は，ほぼ完形だが，口縁端部に一部，高台端部にも1/2周程度の欠失がみられる。

体部の稜が明確であり，高台が高いなどの形態的特徴から，草戸千軒町遺跡のⅠ期（13世紀中葉～14世紀初頭）頃[1]の所産と考えられる。

・土師質土器杯（4） 口径14.5㎝，器高3.5～3.8㎝，底径7.7㎝の大きさである。平底の底部はごく薄い。体部は平底から外上方にほぼ直線的に立ち上がり，端部を丸く納める。体部中央がわずかに稜をなす。調整は，体部外面から内面にかけて回転ナデ，内面の体部下半から内底面にかけては指頭によるナデを施す。外底面は回転糸切り離しである。色調は淡黄褐色，胎土は2㎜大以下の砂粒を含む。焼成は良好である。残存状況は，底部中央に1～2㎝大の欠失がみられるが，ほぼ完形である。

形態的特徴としては，扁平気味で（低平度＝器高÷口径 0.24～0.26），底部から口縁部への体部の立ち上がりがわずかに内湾気味ながらほぼ直線的である。また，底部からの体部の開き具合（口径÷底径 1.88）も加味すると，15世紀前半頃[2]の特徴とみられる。

・瓦器椀（5） 口径13.6㎝，器高3.4～3.9㎝，高台径3.4㎝×3.8㎝（楕円形）の和泉型の瓦器椀で，高さ0.1～0.35㎝とごく低い退化した輪高台が残る。体部は底部から外上方に緩やかな曲線を描いて内湾気味に延び，端部を丸く納めて口縁とする。器壁の厚さは2～3㎜と薄い。調整は，外面が口縁部～体部上半は回転ナデ，体部下半は指頭による調整，内面は体部上半が概ね横方向の細かい回転ナデ，体部下半から内底面にかけては一定方向の細かいナデを施している。内面全体に幅2～3㎜の細い暗文がみられる。体部はほぼ横方向の直線（平行線），内底面は連結輪状の暗文である。色調は暗灰色を主体にするが，口縁部周辺内外面は灰黒色，体部外面も全体に黒味を帯びている。胎土は，全体に精良だが，外面は1～2㎜大の砂粒が比較的多くみられる。焼成は良好で，硬質である。残存状況は，高台部分は完存するが，口縁部～体部は3/5周ほどの残り具合である。

その形態的特徴などから，13世紀半ば（Ⅳ-1期）頃[3]の所産と考えられる。

③金属製品 煙管（6），釘状鉄製品（7），用途不明銅製品（8），銅銭（寛永通寶）（9）がある。

・煙管（6） 長さ6.6㎝，高さ2.5㎝の鉄製雁首の端に竹製と思われる羅宇が1㎜ほど残る。外径1.6㎝，高さ1㎝の丸みの強い整美な火皿に首部が付く。首部の脂返しのカーブはゆるく，肩部にかけて緩やかに膨らむものの，脂返しと肩部の境は明瞭ではない。首部の外径は0.6～0.85㎝である。わずかに残る羅宇の外径は0.75㎝である。火皿に向かって左側面に継ぎ目がみられる。

その形状から古泉弘編年の（Ⅲ～）Ⅳ期[4]，川口宏海編年の17世紀後半～18世紀初頭

頃[5]の所産とみられる。

・釘状鉄製品（7） 平面円形で扁平気味の頭部に鈍く先端を尖り気味に納める身部が付く。大きさは全長 8 ㎝，重さ 28 gで，頭部の径 1.9 ㎝，厚さ 1.1 ㎝，身部の長さ 6.1 ㎝，幅・厚さ（最大）1 ㎝である。頭部は現状は中央が丸く凹むが，本来的には径 4 ～ 6 ㎜程度に貫通すると考えられる。色調は表面暗褐色，破断面黒褐色で軟質であり，鋳鉄製の可能性がある。身部中央で破断しており，その破断面の観察によると少なくとも身部には辺 4 ㎜ほどの断面方形状の中空部分があり，内部には下端が尖る幅 2 ～ 3 ㎜，厚さ 1 ㎜ほどの扁平で細長い芯状の鉄製品 2 本が入れ込まれている。

この鉄製品については，一見釘状であるが，その材質や細く薄い 2 枚の芯状の鉄板の存在などから，用途や性格については明確にしがたい。

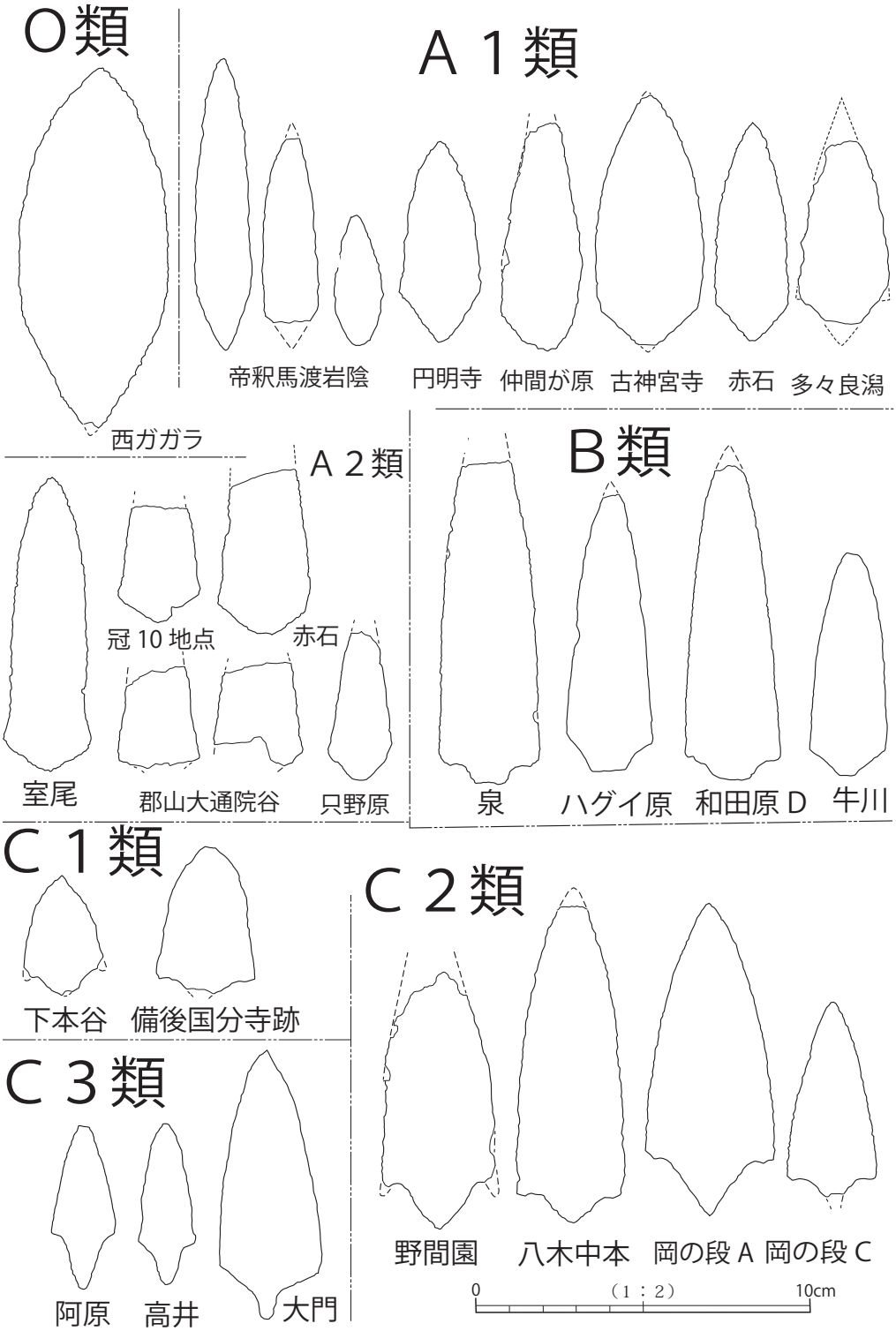
・用途不明銅製品（8） 平面長方形，断面中空の長楕円形の製品で，大きさは平面 2.2 ㎝× 1.5 ㎝，高さ 0.6 ～ 0.7 ㎝，厚さ 0.1 ㎝である。色調は暗黄茶褐色で，表裏面に 1 文字ずつ刻銘がみられる。一面には「主」，もう一面には「補（に類似した漢字）」が天地逆に刻されている。これらの刻銘については，その意味するところは不明である。

・銅銭（寛永通寶）（9） 銭径（外径）2.1 ㎝，郭は一辺 0.9 ㎝で，厚さは 1 ㎜に満たずごく薄い。全体に残存状況は良くないが，特に「通」と「永」の間の縁辺は欠損している。縁は表裏とも幅 2 ㎜で比較的整美であるが，郭の幅は 1 ㎜以下とごく狭い。裏の郭の幅は上辺・右側辺はごく狭く，左側辺・下辺は 1 ㎜程度と広い。銭銘は特に「寛」「寶」は不鮮明で，「通」「永」は比較的鮮明である。「通」はいわゆる「ユ頭通[6]」の特徴がみられる。

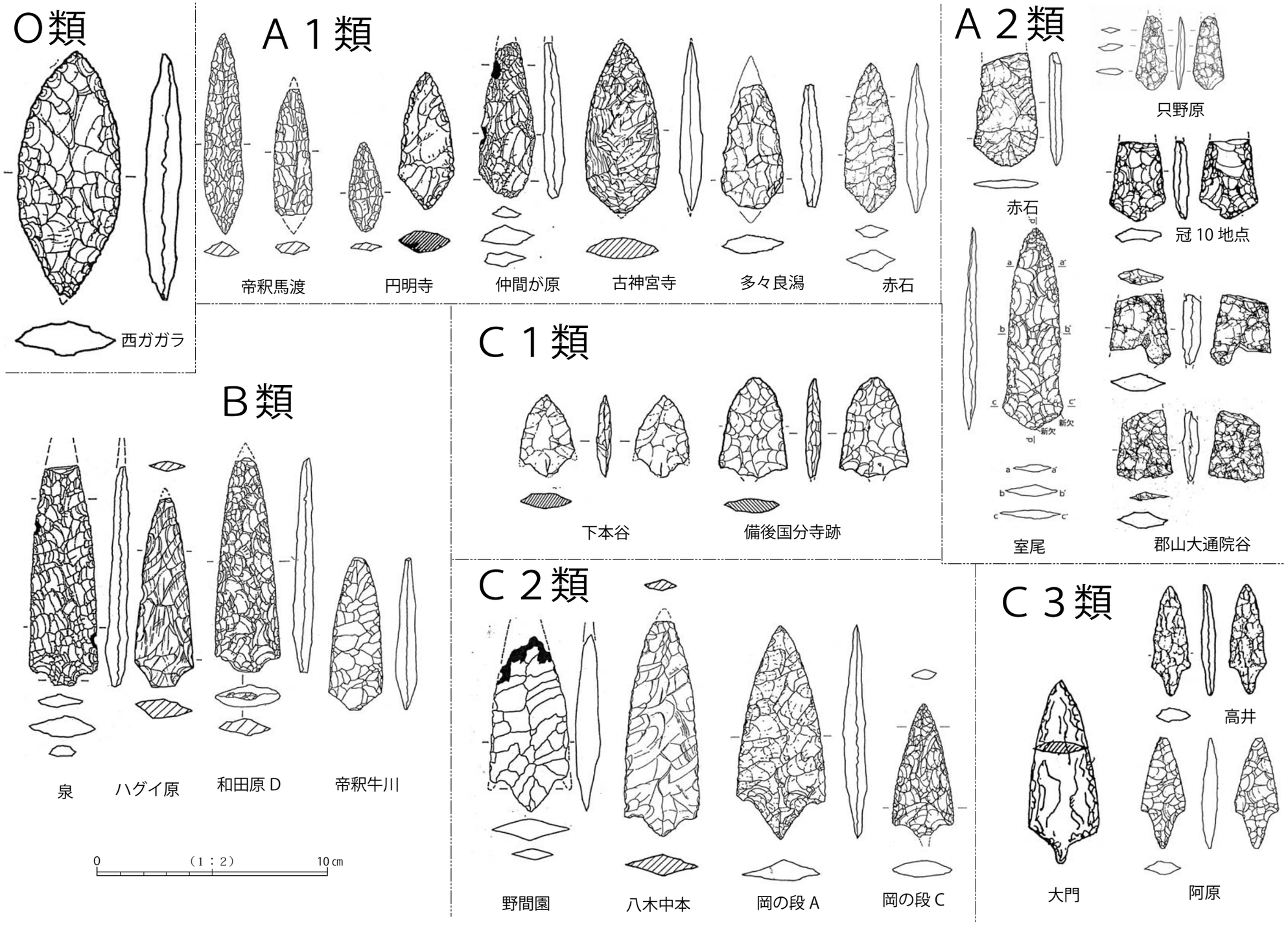
広島県内における有茎尖頭器の類例と若干の検討

広島県内で出土した有茎尖頭器は 27 遺跡 31 点が知られている（第 1 表，第 5･6 図）。ただ，その多くは表面採集によるもので（19 点），発掘調査によるものは 12 点にすぎない。発掘調査によるものの大半は単独出土であり，縄文土器が比較的近くから出土したのは帝釈馬渡岩陰遺跡第 4 層出土例（3 点，無文土器伴出）と只野原 3 号遺跡（第 1 次調査区）縄文層出土例（やや離れて隆起線文土器出土）のみである。一般的に，有茎尖頭器は縄文時代草創期前半の隆起線文土器群に主体的に伴い，後半の時期には石鏃を伴う[7]とされている。

県内出土例を平面形態別に大きくグループ分けすると，基部が逆三角形に尖るもの（A 類），茎部の逆三角形の両斜辺が内湾気味に凹み，短い茎部を作出するもの（B類），茎部が身部から明確に直角に縊れて，明確で長い茎部を作出するもの（C類）である。A類はA 1 類・A 2 類，C類はC 1 類・C 2 類・C 3 類に細分できる。



第5図　広島県内出土有茎尖頭器実測図（輪郭）（1：2）各文献掲載の実測図を再トレース。



第6図 広島県内出土有茎尖頭器実測図（1：2） 各文献掲載の実測図を一部改変して使用した。

第1表　広島県内出土有茎尖頭器一覧表　　（単位；cm）

№.	所在地①	所在地②	遺　跡　名	出土状況	型式	長さ	幅	厚さ	残存状況	石　材	文　献	備　考
1	呉市	（倉橋町室尾）		表面採集	A2	8.65	2.6	0.6	完形	安山岩	本報告	
2	呉市	焼山町	泉遺跡	表面採集	B	(9.6)			先端欠	安山岩	1	
3	呉市	焼山町此原	野間園遺跡	表面採集	C2				先・基欠	安山岩	1	
4	呉市	焼山町	仲間が原遺跡	表面採集	A1	(6.75)			先端欠	安山岩	1	
5	安芸郡	熊野町	ハゲイ原遺跡	表面採集	B	(8.2)	2.5	0.8	先端欠	安山岩	2	
6	安芸郡	熊野町	才の神遺跡	表面採集							2	
7	広島市	佐伯区	円明寺遺跡	表面採集	A1	5.8	2.2	0.9	完形	安山岩	3	
8	広島市	佐伯区	千同遺跡	表面採集						安山岩	4	
9	広島市	佐伯区	高井遺跡	表面採集	C3	4.7	1.6	0.6	完形	安山岩	5	
10	広島市	安佐南区	八木中本遺跡	表面採集	C2	(9.2)	3.2	0.9	先端欠	安山岩	6	
11	東広島市	鏡山	西ガガラ遺跡第1地点	発掘・単独	O	(5.2)	2.2	0.7	基部少欠	安山岩	7	
12	東広島市	志和町	阿原遺跡	表面採集	C3	(4.7)	1.9	0.6	先端欠	黒曜石	8	
13	廿日市市	吉和	冠遺跡第 10 地点	表面採集	A2	(3.05)	2.15	0.6	上半欠	安山岩	9	
14	廿日市市	河津原	法殿平遺跡	表面採集	A1				先・基欠	安山岩	10	
15	廿日市市	宮島町	赤石遺跡	表面採集	A1	6.45	2.15	0.9	完形	安山岩	11	
					A2	(4.85)	2.75	0.5	上半欠	安山岩		
16	廿日市市	宮島町	多々良潟遺跡	表面採集	A1	(5.4)	2.7	0.9	先・基欠	安山岩	12	
17	安芸高田市	吉田町	郡山大通院谷遺跡	発掘・単独	A2	(2.95)	2.4	0.7	上半・基欠	細粒凝灰岩	13	未成品
					A2	(3)	2.6	0.85	上半・基欠	流紋岩～凝灰岩系		未成品
18	北広島町	大朝	岡の段 A 地点遺跡	発掘・単独	C2	9.2	3.8	0.9	完形	安山岩	14	
19	北広島町	大朝	岡の段 C 地点遺跡	発掘・単独	C2	(5.7)	2.6	0.7	茎部欠	安山岩	15	
20	三次市	西酒屋町	下本谷遺跡郡衙政庁地点	発掘・単独	C1				基端欠	安山岩	16	
21	庄原市	新庄町	和田原 D 地点遺跡	発掘・単独	B	(9.25)	2.75	0.95	先端欠	安山岩	17	
22	庄原市	東城町	帝釈馬渡岩陰遺跡第4層	発掘	A1	8.9			完形	安山岩	18	
					A1	6.5	2.2	0.9	先・基欠	安山岩		
					A1	4.0			完形	安山岩		
23	庄原市	東城町	帝釈牛川岩陰遺跡	発掘・単独	B	(6.4)			先・基欠？	安山岩	19	
24	庄原市	高野町	只野原3号遺跡	発掘	A2	(4.1)	1.9	0.5	先端欠	流紋岩	20	
25	尾道市	向島町	古神宮寺遺跡	表面採集	A1	(7.3)	3.2	0.9	基端欠	安山岩	21	
26	福山市	大門町	大門貝塚	表面採集	C3				完形	安山岩	22	
27	福山市	神辺町	備後国分寺跡	表面採集	C1	(4.2)	2.8	0.6	基部欠	安山岩	23	

＊「型式」「文献」以外の数値・事項は原則各文献に依った。

文献

1. 古瀬清秀「第一章　呉のあけぼの」『呉の歴史　呉市制一〇〇周年記念版』呉市役所　2002 年。
2. 河瀬正利「熊野町の遺跡と遺物」『熊野の歴史（研究ノート）』第2号　広島県安芸郡熊野町　1984 年。
   河瀬正利「縄文時代」『安芸郡熊野町史』通史編　広島県安芸郡熊野町　1987 年。
3. 広島県教育委員会『円明寺（延命寺）遺跡発掘調査報告』1971 年。
4. 脇坂光彦・小都隆『日本の古代遺跡　26　広島県』保育社　1986 年。
5. 島立桂・高橋彰子・竹広文明・藤野次史「佐伯郡五日市町観音地区の遺物（3）」『続トレンチ』第6巻第4号（24）広島大学考古学研究室　1986 年。
6. 河瀬正利「歴史のあけぼの」『高陽町史』広島市役所　1979 年。
7. 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－ががら地区の調査－』2004 年。
8. 小都隆「東広島市志和町阿原出土の有舌尖頭器」『芸備』3　芸備友の会　1975 年。
9. 藤野次史「広島県佐伯郡吉和村冠遺跡群採集の遺物（2）」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅸ』1986 年。
10. 藤野次史「広島県」『第6回中・四国旧石器文化談話会資料－中・四国地方における旧石器時代終末期の諸問題－』1989 年。
11. 古瀬清秀「厳島における考古学的踏査とその検討（1）」『内海文化研究紀要』第 34 号　広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設 2006 年。
12. 菅紀浩「広島県厳島，多々良潟遺跡採集の有茎尖頭器」『半田山地理考古』第7号　岡山理科大学地理考古学研究会　2019 年。
13. 財団法人吉田町地域振興事業団『郡山大通院谷遺跡』2003 年。
14. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「岡の段 A 地点遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）』1993 年。
15. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「岡の段 C 地点遺跡（1989 年度）の調査」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅳ）』1994 年。
16. 下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡－推定備後国三次郡衙跡の発掘調査報告－』1975 年。
17. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原 D 地点遺跡発掘調査報告書』1999 年。
18. 潮見浩「帝釈馬渡岩陰遺跡の調査」帝釈峡遺跡群発掘調査団『帝釈峡遺跡群』亜紀書房　1976 年。
    潮見浩「帝釈馬渡岩陰遺跡」『東城町史』第1巻　自然環境　考古　民俗　資料編　東城町　1996 年。
19. 川越俊一・乗安和二三「戸宇牛川岩陰遺跡の調査」帝釈峡遺跡群発掘調査団『帝釈峡遺跡群』亜紀書房　1976 年。
20. 財団法人広島県教育事業団「只野原3号遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）』2013 年。
21. 福井万千「御調郡向島町古神宮寺遺跡出土の槍先形尖頭器」『調査研究ニュース草戸千軒』№.180　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1988 年。
22. 村上正名「原始時代」『福山市史』福山市史編纂会　1963 年。
23. 小都隆「備後国分寺跡採集の有舌尖頭器」『調査研究ニュース草戸千軒』№.39　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1976 年。

Ａ１類は逆三角形の基部が長いもの，Ａ２類は短いもの。Ｃ１類は小型で丸みの強い身部に短い端部が尖る茎部が付くもの，Ｃ３類は全体に細身で小型の身部に細長く先端が尖る茎部が付くものである。なお，O類は木葉形のものである。類型別にみてみると，

A類；15 点

Ａ１類；9 点＝馬渡（3 点），赤石①，多々良潟，仲間が原，円明寺、法殿平，古神宮寺

Ａ２類；6 点＝室尾，冠 10，郡山大通院（2 点），赤石②，只野原 3 号

B類；4 点＝泉，ハグイ原，和田原D，牛川

C類；9 点

Ｃ１類；2 点＝下本谷，備後国分寺跡

Ｃ２類；4 点＝野間園，八木中本，岡の段A，岡の段C

Ｃ３類；3 点＝高井，阿原，大門

O類；1 点＝西ガガラ

今回資料紹介する室尾例は逆三角形の茎部が短いＡ２類に分類されると思われる。藤山龍造によれば，これらはA類→B類→C類といった形態的変遷を辿る[(8)]とされており，これによれば室尾例は有茎尖頭器のなかでも比較的古い時期に属する可能性があるが，その詳細については，室尾例を含めて県内出土の有茎尖頭器の殆どが表面採集あるいは単独出土例であることなどから，これ以上の検討・追及は困難と考えられる。

おわりに

以上，呉市倉橋町室尾周辺出土と考えられる寄贈考古資料について，触れてきた。寄贈資料 9 点のうちその所属時期が特定できるのは，縄文時代草創期の有茎尖頭器 1 点，中世の土師質土器椀・杯と瓦器椀各 1 点，近世の古銭（寛永通寶）1 点のみであり，石錘状石製品，釘状鉄製品，用途不明銅製品各 1 点については所属時期及び用途（性格）不明である。これらの考古資料がどの遺跡からどのような状況で出土したのか興味あるところではあるが，それを窺い知ることはもはや不可能である。ただ，いずれの考古資料も倉橋島のいずれかの遺跡で出土した可能性は高い。

最後になりましたが，今回貴重な考古資料を寄贈いただいた三田村修氏に深く感謝します。また，広島大学名誉教授藤野次史氏には，広島県内の有茎尖頭器の実測図の閲覧等に便宜を図って頂くとともにその他色々有益なご教示を賜りました。記して感謝します。

注

(1) 鈴木康之「付 2　草戸千軒」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集　国立歴史民俗博物館　1997 年。

(2) 注（1）に同じ。

(3) 佐藤亜聖「畿内産瓦器椀」日本中世土器研究会編『新版 概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　2022 年。

(4) 古泉弘『江戸の考古学』ニューサイエンス社　1987 年。

(5) 川口宏海「兵庫県伊丹郷町遺跡出土の煙管について」『大手前大学社会文化学部論集』第 1 号　2001 年。

(6) 藤光秀雄『寛永通寶 収集・分類・整理』文芸社　2013 年。
藤光秀雄『続寛永通寶 銭字特徴の表札　寛永通寶　工芸品』文芸社　2016 年。

(7) 及川穣「石器に見る生活の変化（2）西日本」『季刊考古学』第 132 号　雄山閣出版　2015 年。
藤山龍造「石鏃出現期における狩猟具の様相」『考古学研究』第 50 巻第 2 号　2003 年。
上峯篤史『縄文石器　その視角と方法』京都大学学術出版会　2018 年。
軽部達也「縄文時代草創期の石器群の様相と変化」大工原豊ほか編『縄文石器提要』ニュー　サイエンス社　2020 年。

(8) 藤山龍造「石鏃出現期における狩猟具の様相」『考古学研究』第 50 巻第 2 号　2003 年。

参考文献

地理的・歴史的環境の項を中心に，記述に当たっては下記諸文献を参考にした（五十音順）。

奥本剛『呉・江田島・広島 戦争遺跡ガイドブック』光人社　2009 年。

下蒲刈町『多賀谷水軍と丸屋城跡』　1981 年。

下向井龍彦「中世の呉」『館報いりふね山』創刊号　入船山記念館　1986 年。

下向井龍彦「石清水八幡宮寺領安芸国呉保の成立」『芸備地方史研究』166･167 号　芸備地方史研究会　1989 年。

下向井龍彦「「古代・中世の呉」年表（稿）」『芸備地方史研究』173 号　芸備地方史研究会　1990 年。

下向井龍彦「第三章　古代の倉橋」「第四章　中世の倉橋島」『倉橋町史』通史編　倉橋町　1991 年。

下向井龍彦「二　倉橋の古代・中世資料」『倉橋町史』資料編Ⅱ　倉橋町　1991 年。

下向井龍彦「第二章　古代の呉」「第三章　中世の呉」『呉の歴史　呉市制 100 周年記念版』呉市役所　2002 年。

新谷武夫「第二章　倉橋のあけぼの」『倉橋町史』通史編　倉橋町　1991 年。

新谷武夫「一　倉橋の埋蔵文化財」『倉橋町史』資料編Ⅱ　倉橋町　1991 年。

広島県安芸郡倉橋町『倉橋多賀谷氏と丸子山城跡』　1986 年。

広島県立文書館『平成 22 年度収蔵文書展 激動の時代 幕末維新の広島と古文書』　2011 年。

藤野次史「広島県」『日本列島の旧石器時代遺跡－日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡データベース－』日本旧石器学会　2010 年。

藤原健蔵・堤信行・前埜英明「Ⅰ　地形分類図」『都道府県土地分類基本調査　柱島・倉橋島』　広島県企画振興部地域振興課　1998 年。

古瀬清秀「第一章　呉のあけぼの」『呉の歴史　呉市制一〇〇周年記念版』呉市役所　2002 年。

松浦浩久「倉橋島及び柱島地域の地質」『地域地質研究報告 5 万分の 1 地質図幅 高知（13）第 25・26 号』地質調査所　1997 年。

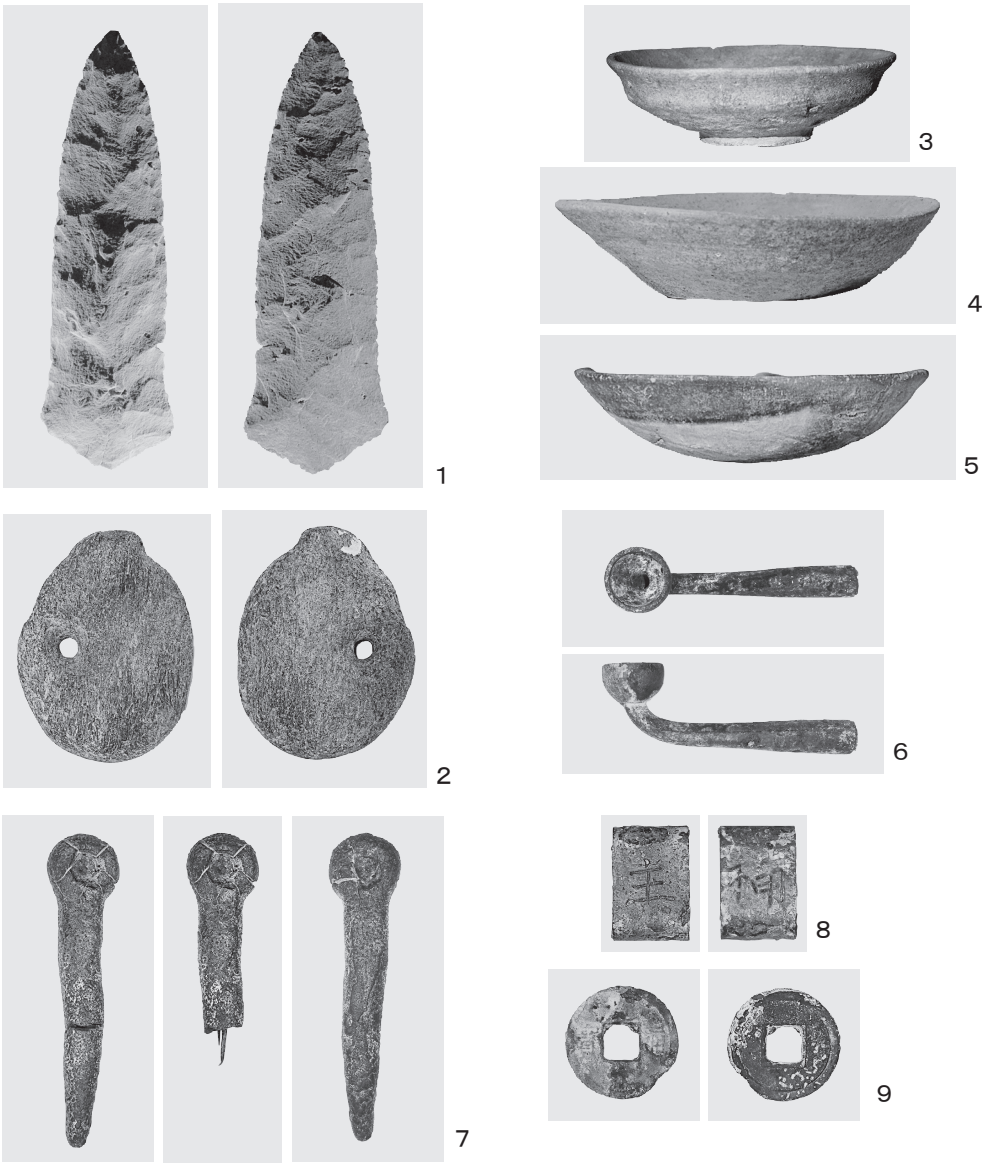


写真1 遺 物

Archaeological materials excavated around Muroo, Kurahashi Town, Kure City

Kenji Umemoto

This paper introduces nine archaeological materials donated to the Hiroshima University Museum by a citizen living in Kure City, Hiroshima Prefecture. The origin and excavation status of these archaeological materials are not clear, but it is possible that they were excavated around Muroo, Kurahashi Town, Kure City.

The stemmed pointed tool is from the early Jomon period and is thought to be made of andesite. With a length of 8.65 cm, a width of 2.6 cm, and a weight of 13 g, it is thin and lightweight. There are 27 stemmed pointed tools excavated in Hiroshima Prefecture, but most of them were surface collected or excavated alone. The planar shape is divided into three types: one in which the base is pointed into an inverted triangle (Class A), one in which both hypotenuses of the inverted triangle of the stem part are concave in the inner bay to produce a short stem part (Class B), and one in which the stem part is clearly bound at right angles from the body to produce a clear and long stem part (Class C), and it is thought that the transition of class A (old) → class B → class C (new) is traced. All three pieces of earthenware are from the Middle Ages: earthenware and bowls, cups, tiles, and bowls.